



SDGs エスディーゼーズと読み、Sustainable Development Goalsという英語の頭文字からとった略称。「持続可能な開発目標」と訳されている。2015年の国連総会で採択され、貧困や飢餓、教育、男女の平等、働きがい、生産消費、生態系の保全など17項目の目標を掲げている。目標の下には、具体策や数値目標などを示した計169のターゲットがある。



ジェンダーに基づく差別は、私たちの日常にも存在していることを意識しているだろうか。地球規模の問題だけに、かかえのない地球を守ろうと、国連は2030年までに達成すべき行動計画を「持続可能な開発目標(SDGs)」として採択した。今月は、男女問題に取り組むガールスカウト日本連盟の活動を紹介する。

ガールスカウト日本連盟 鈴木榛香さん・古泉歩美さん

「男女の役割」問い直す

今回の主な目標

5 ジェンダー平等を実現しよう

10 人や国の不平等をなくそう

男女の役割を問う活動として、8月30日(水)に、同世代の男女が参加する「ジェンダー平等を問う」ワークショップを開催する。

Mission

差別の実態は

国内における男女平等、ジェンダーに基づく差別の実態は、ガールスカウト日本連盟は2019年3月、女子高生524人にアンケート調査を実施した。これはSDGsの目標5「ジェンダー平等」、目標10「人や国の不平等をなくそう」を目指す取り組みだ。

栃木県の太宰一年、鈴木榛香さん19は「自分には性差の固定観念はないと思っていた。でも、知らないうちに女子はこうあるべきだと考えていた」と、目からうろこが落ちる思いで調査結果を受け止めた。

例えば、学校現場での男女の役割分担についての質問には、「約9割が男女が同程度」を理想と回答したのに、実際は、校長の81%が男性であり、女子が中心の役割を担うのは、理科の実験で7%、調理実習では2%だった。

東京都の看護学生、古泉歩美さん18も「性差での役割の『押しつけ』が問題だとわかった。この結果を広く伝えたいと考えているように感じた。

Action

国会内で訴え

まず、ガールスカウトの仲間約10人で調査結果を話し合ってみると、「テレビ番組は男性司会者が中心で、女性は補佐役が多い」「女の子だから〇〇すべき」と先生から言われた「など、身近なところにも多くの性差別が潜んでいることがわかった。

こうした議論を経て、報告書「女子高校生が感じるジェンダーバイアス」は完成した。さらに、国会議員にも知ってもらおうと、昨年6月には国会内で報告会を開催する機会を得た。

「大人にも共感してもらえなかったらいい。古泉さんはそんな不安を持ちつつも、マイクを手に、「全国の子供たちが『女の子は』という固定観念を受け取って生活している。性的な嫌がらせや否定的なメッセージを受けると不安を感じ、挑戦することを諦めてしまう」と語りかけた。

Goal

同世代で共有

一連の活動は周りを巻き込み、広がりつつある。鈴木さんは、中学・高校合同の全校集会で一連の活動を報告。「友人は驚き、嫌な体言や問題意識を持っていくことがわかった。同世代で気づきを共有する大切さを実感した」と振り返る。古泉さんも、地元のガールスカウトの中高生たちとワークショップを企画し、「後輩たちに伝えること、きくと社会を変えていく」と感じている。

ガールスカウト日本連盟の河合早希さんは、「女性が生きやすい社会は、皆が生きやすい社会。これからの日本を担う世代の行動に期待したいです」と語る。問題意識を持った若者が成長し、その数が増えれば、状況は必ず変わっていくはずだ。



ジェンダーに関する調査について、国会内で報告会を開催した「ガールスカウト日本連盟」のメンバー。

アンケート調査報告書

ワードラボ

ジェンダー

生物学的な男女差のことではなく、「男性らしさ」「女性らしさ」な性的、社会的、文化的に作られた性差のこと。世界経済フォーラムの男女平等度ランキング(2019年版)で日本は153か国のうち121位で、先進7か国(G7)で際だって低い。特に女性閣僚や国会議員の少なさが目立つ。政府は、指導的地位に占める女性の割合を今年までに30%にするとしているが、実現には遠い状況だ。

男女平等度ランキング ()内は前年順位

1	(1) アイスランド	21	(15) 英国
2	(2) ノルウェー	53	(51) 米国
3	(4) フィンランド	76	(70) イタリア
10	(14) ドイツ	81	(75) ロシア
15	(12) フランス	106	(103) 中国
19	(16) カナダ	121	(110) 日本

*SDGs@スクールは毎月1回(第1水曜日)お届けします。

編集後記

「このテーマを学ぶ機会が、これまで授業にもどこにもなかった」。取材した2人はそう口をそろえた。「女の子は赤色」「男の子は青色」といった刷り込みが幼少期からあったとの指摘も、胸に響いた。昨夏

フォーラムへ2人を誘ったJAWW(日本女性監視機構)の石川美幸さんは「本来ならば小学校から必要

学び。早く気づくことは人生の選択肢を増やし、より豊かに生きることが可能にする」と語る。この記事を読んでもくれた若者も大人も、彼女たちの発見を共有してもらいたい(教育ネットワーク事務局 榎原智子)